

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 12 日現在

機関番号：82620

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23720393

研究課題名（和文）イラン、マルヴ・ダシュト盆地における新石器化の考古学的研究

研究課題名（英文）Archaeological Study on the Neolithization in the Marv Dasht Plain, Iran

研究代表者

安倍 雅史（Masashi ABE）

独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所・文化遺産国際協力センター・アソシエイト・フェロー

研究者番号：50583308

研究成果の概要（和文）：

肥沃な三日月弧は、地中海型農耕の起源地として知られている。しかし、過去 30 年間、肥沃な三日月弧の東翼ザグロス地域では不安定な政局を受け、新石器研究が著しく停滞してきた。

本研究では、研究の空白地域であったザグロス地域における新石器化のプロセスを解明することを目的に、ザグロス南部のファールス地方マルヴ・ダシュト盆地周辺を対象に考古研究を実施した。

研究の結果、紀元前 6000 年前後に、当該地域の石器製作伝統が大きく変貌したことが明らかとなった。この時期に本格的にヤギ・ヒツジ飼育そして灌漑農業が導入され生業が大きく変化したことと関係があると推測された。

研究成果の概要（英文）：

The Fertile Crescent in the Middle East is known as a center of origin for domestication of animals and plants. In the last 30 years, the Neolithic Age in the eastern wing of the Fertile Crescent, Zagros, was far less investigated due to unstable political circumstances.

This project aimed to study the process of the Neolithization in the Zagros. In particular, the author examined the Neolithization in the Marv Dasht plain, Fars in the southern Zagros.

The project revealed that the lithic tradition in this region radically changed around 6000 BC. This change was probably caused by great changes in subsistence; introduction of full scale herding of sheep and goats and introduction of irrigation systems.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|-------|-----------|---------|-----------|
| 交付決定額 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：肥沃な三日月弧、ザグロス、新石器化、紀元前 6000 年、石器製作

1. 研究開始当初の背景

西アジアの「肥沃な三日月弧」は、地中海型農耕の起源地として知られている。過去 30 年間、肥沃な三日月弧の西翼をなすレヴァント地域で新石器時代研究が大きく進展したのに対し、東翼をなすザグロス地域では不安定な政局を受け、新石器時代研究が著しく停

滞してきた。その結果、農耕・牧畜はレヴァント地域に起源し、ザグロス地域が新石器化に果たした役割は小さいという学説が形成されてきた。

しかし、今世紀に入り急速に進歩した遺伝子研究は、西アジアの新石器化においてザグロス地域が重要な役割を演じた可能性があ

ることを明らかにしている。

2008年にユーラシア各地の野生・家畜ヤギの遺伝子の比較研究が行われているが、その結果、世界で最初にヤギの家畜化が進行した地域は、ザグロス地域（なかでもファールス地方）であった可能性があることが指摘されている。

また、2007年には、ユーラシア各地の野生・栽培大麦を対象に遺伝子研究が行われている。この結果、世界には大麦の系統が2系統あり、ヨーロッパ、アフリカで栽培されている大麦はレヴァント地域に起源し、東アジア、中央アジアで栽培されている大麦はザグロス地域に起源した可能性が高いことが指摘されている。

さらに、エンマー小麦に関しても、遺伝子研究から、ザグロスの野生種とタウロスの野生種が交配したものが、栽培エンマー小麦の祖先種になった可能性が高いことが指摘されている。

本プロジェクトを開始した時期、このような学術的背景のもと、ザグロス地域を対象に本格的な考古学研究を実施することが強く求められていた。

2. 研究の目的

本プロジェクトの目的は、今まで研究の空白地域であったザグロス地域における新石器化の具体的なプロセスを考古学的に解明することである。

そのため、筆者は、ザグロス南部ファールス地方マルヴ・ダシュト盆地周辺を対象地に選定し、本プロジェクトを始動した。

3. 研究の方法

ファールス地方マルヴ・ダシュト盆地は、ザグロス山脈南部にある内陸盆地の1つである。この盆地周辺をフィールドに選定したのは、①イラン革命によって外国隊による調査が禁止される1979年以前、新石器時代研究が集中的に行われ、比較的資料が充実した地域であるため、②また近年の遺伝子研究によって、ヤギの家畜化が世界で最初に進行した地域である可能性が指摘されているためである。

本プロジェクトでは、とくにマルヴ・ダシュト盆地周辺の2つの新石器時代の初期農耕村落ラハマタバード遺跡とカッスル・エ・アハマド遺跡から出土した考古資料とくに石器資料を中心に分析を行った。

この2遺跡は、ザグロス南部の新石器時代を研究する上で、とくに注目を集めている遺跡である。

ラハマタバード遺跡は、マルヴ・ダシュト盆地の北東カミン盆地に位置する小型の遺丘である。2005年にアメリカ隊が発掘した後、2009年、2011年にテヘラン大学のホセ

イン・アジジが中心となって再発掘を行い、銅石器時代（バクーン文化期）、土器新石器時代前半（ムシュキ期：6350-6050calBC）、先土器新石器時代（7400-6700calBC）の3時期の層を確認した。従来、ザグロス南部では先土器新石器時代の層を持つ遺丘は知られておらず、長い間、土器新石器時代前半になって、はじめて西方から農耕文化を持った集団が移住してきたと考えられてきた。先土器新石器時代の層を持つ遺丘が存在しないことが、ザグロス南部の後進性の証拠とされてきた。しかし、ラハマタバード遺跡ではじめて先土器新石器時代の層を持つ遺丘が見つかったことにより、ザグロス南部における新石器化が千年近く遡ることが明らかとなった。

カッスル・エ・アハマド遺跡は、マルヴ・ダシュト盆地の南東、カラ・アガジ谷にある新石器時代の遺丘である。この遺丘の存在をはじめて報告したのは、アメリカの調査団であった。2003年、2004年にこの遺跡を訪問したアメリカ隊は、カヴァールという名前でのこの遺跡を報告している。アメリカ隊は、この遺丘の大きさを南北500m×東西100mと報告し、表採品から遺跡の年代をマルヴ・ダシュト盆地のムシュキ期に平行する土器新石器時代前半（紀元前7千年紀後半）と推定している。

その後、2012年に、テヘラン大学のホセイン・アジジが、試掘調査を実施している。この調査で、とくに注目を集めたのが、上層の土器新石器時代前半の層（紀元前7千年紀後半）の下から、先土器新石器時代の層が確認されたことである。これはラハマタバードに引き続き、ザグロス南部で先土器新石器時代の層が見つかった2例目であった。この発見により、ザグロス南部の新石器化が先土器新石器時代に、さかのぼることはほぼ確実となった。

また、ホセイン・アジジは、この遺跡の大きさを10haと推定している。ザグロス地域の新石器時代の遺丘の大きさは、通常1ha以下と非常に小さい。もし、ホセイン・アジジの推定が正ければ、この遺跡はザグロス最大級の遺跡となる。この遺丘の大きさからも、この遺跡は現在、研究者の注目を集めている。

現在、カッスル・エ・アハマド遺跡とラハマタバード遺跡から出土した植物遺存体や動物遺存体などの資料は、各専門家によって分析されている。筆者は、その中で打製石器の分析を担当した。

カッスル・エ・アハマド遺跡とラハマタバード遺跡の石器資料は、ザグロス南部ではじめて得られた先土器新石器時代の資料として非常に貴重である。

また、筆者は、タル・イ・ムシュキ遺跡とタル・イ・ジャリ B 遺跡出土の石器資料を参

考資料とした。両遺跡ともマルヴ・ダシュト盆地にある新石器時代の遺丘で、1950年代～60年代にかけて東京大学が発掘した遺跡である。タル・イ・ムシュキ遺跡は土器新石器時代前半のムシュキ期(6350-6050cal BC)の、タル・イ・ジャリB遺跡は土器新石器時代後半のジャリ期(6050-5700cal BC)の示準遺跡である。

カッスル・エ・アハマド遺跡(先土器新石器時代・土器新石器時代前半)、ラハマタバード遺跡(先土器新石器時代・土器新石器時代前半)、タル・イ・ムシュキ遺跡(土器新石器時代前半)、タル・イ・ジャリB遺跡(土器新石器時代後半)の4遺跡の石器資料を共に考察することにより、先土器新石器時代から土器新石器時代後半にかけて、約1700年間に渡る石器技術の変遷を研究することが可能となった。

4. 研究成果

カッスル・エ・アハマド遺跡およびラハマタバード遺跡の石器資料の分析を実施した結果、先土器新石器時代から土器新石器時代後半にかけての石器製作技術の変遷が明らかとなった。

研究の結果、先土器新石器時代と土器新石器時代前半の石器製作技術は類似しており、石器製作技術上の画期は、土器新石器時代後半、紀元前6050年ごろにあったことが判明した。

先土器新石器時代には、チャートと黒曜石が石器の原材料として利用されている。チャートからは、押圧剥離によって石刃と細石刃が連続的に剥離されていた。細石刃は、三日月形石器、台形石器、背潰し石刃といった狩猟具の素材に使用されたのに対し、石刃は、鎌刃や搔器、鋸歯縁石器といった狩猟以外の用途の道具の素材に利用されていた。黒曜石からは細石刃のみが押圧剥離によって剥離されていた。黒曜石製の細石刃も、チャートと同様に狩猟具の素材に利用されていた。

この石器の製作パターンは、若干の変化がみられるものの、土器新石器時代前半にも引き継がれていた。

しかし、土器新石器時代後半、紀元前6050年以降になると、大きく石器製作のパターンが変化する。まず、狩猟具が著しく減少する。そして、チャートからは石刃のみが剥離されるようになり、狩猟具の素材であった細石刃が剥離されなくなる。また、狩猟具の素材用に細石刃のみが剥離されていた黒曜石に関しては、土器新石器時代後半になると黒曜石そのものがまったく出土しなくなる。

筆者は、この紀元前6050年ごろに起こった石器製作上の変化は、生業が大きく変化したことによって狩猟活動が衰退したことによるものと推定している。

先土器新石器時代に関してはデータが揃っていないものの、土器新石器時代前半に関しては生業に関するデータが出版されている。それらの研究によれば、この地域では、土器新石器時代前半のころは、いまだ「農耕・狩猟経済」であったことが判明している。オオムギやインコルンコムギ、エンマーコムギの天水農耕が行われヤギ飼育が実施されていたものの、いまだ野生動物(オナガールとガゼル)の狩猟に強く依存していたことがわかっている。

しかし、紀元前6050年以降の土器新石器時代後半になると、本格的なヤギ・ヒツジ飼育、灌漑農耕が導入され、狩猟活動が著しく衰退する。

本プロジェクトの結果、この生業上の変化が、石器製作にも強く影響を与えたという見通しを得ることができた。

紀元前6000年は、西アジアの新石器時代の中で、一つの画期となる年代である。例えば、西アジアの北縁コーカサス地域に農耕・牧畜が普及したのは、紀元前6000年前後と言われている。また、中央アジアに西アジアから農耕・牧畜が伝播したのも紀元前6000年頃とされている。さらに灌漑農業を伴い本格的に人々が南メソポタミアに進出したのも、紀元前6000年頃と想定されている。

この紀元前6000年ごろに、ザグロス南部でも、生業が大きく変わり、石器製作が大きく変化したことが本研究でも確認された。

紀元前6000年ごろ、西アジア各地で様々なイベントが起こった背景として、8.2kイベントによる気候悪化が原因として取り上げられることもあるが、その因果関係は明らかとなっていない。

今後は、紀元前6000年前後に西アジアで何が起こったのか、ザグロス南部を中心に研究を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

(1) Yoshihiro Nishiaki, Hossein Azizi Kharanaghi and Masashi Abe, The Late Aceramic Neolithic Flaked Stone Assemblage from Tepe Rahamatabad, Fars, Southwest Iran, Iran, 査読有、掲載決定

(2) 安倍雅史, ラハマタバード遺跡ムシュキ文化層出土打製石器群から見たザグロス南部の新石器化の様相、西アジア考古学、査読有、第14号、2013、25-35

(3) Masashi Abe, Geometrics from the Settlement of Tall-i Mushki, Southwest Iran, The State of the Stone: Terminologies, Continuities, and Contexts in Near

Eastern Lithics (edited by Elizabeth Healey, Stuart Campbell and Osamu Maeda)、査読有、2011、163-169

〔学会発表〕(計 5 件)

(1) 安倍雅史、ファールス地方カッスル・エ・アハマド出土資料から見たザグロス南部の新石器化：先土器新石器時代層出土打製石器群に関する予備的な報告、日本西アジア考古学会、2013年6月1日、2日、東京大学

(2) Masashi ABE、Neolithization in Fars, Iranian Zagros, Symposium “Palaeolithic of Iran”、2013年4月21日、筑波大学

(3) Masashi ABE、A Study on the Stone Tool Artifacts Excavated from the Early Pottery Neolithic Layer of Rahamatabad, International Workshop: The Late Prehistory of Iran、2012年12月11日、東京大学

(4) 安倍雅史、ホセイン・アジジ、西秋良宏、ザグロス南部ファールス地方ラハマタバード遺跡出土石器資料の研究、第54回日本オリエント学会大会、2012年11月24日-25日、東海大学

(5) 安倍雅史、ラハマタバード遺跡出土石器群から見たザグロス南部の新石器化、日本西アジア考古学会第17回大会、2012年6月9日-10日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安倍 雅史 (Masashi ABE)

独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所・文化遺産国際協力センター・アソシエト・フェロー

研究者番号：50583308

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし